白銀中

主体的に課題を解決する生徒の育成

～基礎的・基本的内容の定着に向けて～

（３年計画の２年次）

校長　　太田　成人

１　研究主題について

今年度の研修主題、副題共に２年目である。令和４年度の各種アンケートより、昨年度の学校目標の「新しい自分に会いに行こう」で「出会えた」が８２％、「白中生であることを誇りに思う」が９５％と学校行事等で積極的に参加している生徒が多いことが分かる。反面、学習に対する意欲が低く、すぐにあきらめてしまい、家庭学習が定着しない。その背景には、家庭環境が不安定という面と、基礎知識の低さが考えられる。学校評価アンケートの結果から、生徒につけさせたい力で最も多かった「主体的に取り組む力」を育むために、「気づく・つながる・創り出す」を意識した教育活動を全職員で展開してしいく。このことから、継続して主体的に目の前にある課題と向きあい、それを解決していく能力を育成していくことが必要と考えられ、主題に設定した。

今年度は、他の教科での学習の仕方を学び合うことで、生徒一人一人の実態に合わせた学習が進められるよう、学年内での授業参観を進めていく。また、生徒の生活のリズムや学習の取り組み方のアンケートを継続して生徒自身の課題に気付かせるとともに、生徒の実態に合わせて基礎的・基本的な知識及び技能を定着していく。授業では、発問や課題の研究を深めて授業展開を図り、生徒が課題解決に向けた必要感や切実感を持続して、主体的に課題に取り組めるよう、生徒の学力向上及び教師の授業力向上を図っていく。

２　研究のねらい

各教科・領域の特性を生かしながら、授業における発問の仕方やＩＣＴを活用した課題提示などの工夫及び、課題に対する立場の表明を明確にして、生徒の学びに対する意欲を喚起させる。特別支援教育の視点を取り入れた授業を展開し、共通実践を進めていくことで、基礎的・基本的内容の定着につなげていく。

３　研究仮説

各教科・各学年において、基礎的・基本的な内容を定着させ、その知識を基に、立場を明確にした活用を図る学習に取り組ませることで、主体的に課題に取り組む自信をもてると考えられる。

４　研究内容

(1)　ア　各教科・領域ごとに、導入における発問の工夫と基礎的・基本的内容の定着に向けての工夫を行い、日々の授業実践を通して検証する。

　　イ　学年間での教員相互の授業参観（6月・7月・11月、全員参加）の際に、指導案検討や授業研究を通して、他教科の様子を知ることで指導力の向上に努める。また、教員相互の同僚性を高め、アの方法についての検証を深める。

　　ウ　授業では、その日学習する課題や目標の可視化を全教員で進めていく。

(2)　研究テーマに沿った内容のアンケートを生徒及び教員に行い、その結果を共有し実践につなげていく。また、生徒の生活実態についても調べ、学習に向かう生活態度の形成につなげていく。

(3)　一般研修では、授業において一人一台端末を活用していけるよう、それぞれの実践内容を発表し合い、スキルアップを図る。

５　研究の経過

(1) 研究仮説に基づく授業研究等

月	日	研究内容	対象
４	３	校内研修についての共通理解	全体会
５	１９	計画訪問・要請訪問に向けての指導案検討	教科部会
	３１	校内研に関わるアンケート実施・集計①	生徒・教員
６	５	教育指導課・総合教育センター・こども支援センター中学校訪問 ◎校内研究テーマに向けての各教科の授業(研究授業参観１回目)	教科部会
		要請訪問〈研究授業支援〉　２学年　社会　山内　典剛教諭	全体会
７	１０	教員相互授業参観　２回目	教科・学年
１１	６	教員相互授業参観　３回目	教科・学年
	２９	領域部会（今年度の研究成果と課題）	領域部会
	３０	教科部会（今年度の研究成果と課題）	教科部会
１２	５	校内研に関わるアンケート実施・集計②	生徒・教員
１	２５	本年度の研究のまとめと次年度に向けて	全体会

(2) 一般研修

月	日	内容
５	２３	NRT分析
８	２１	総合学習についての勉強会（探究プロセスを明確にした学習計画や評価等）

６　研究の成果

(1) 各教科の授業においては、計画訪問や要請訪問を通して、指導案検討会を複数行うことで、各教科の研究を深めることができた。特に、導入における発問の工夫や立場の再表明について、研究協議等で話合いも活発にできた。学年間の授業参観においては、他教科での生徒の様子を知ることで、自分の教科では気づかない生徒の得意な部分を知り、生徒の一人一人の実態に合わせた学習の手立てを知ることができたり、教科の特性を生かした授業展開を知れたりと学びが多かった。

(2) 授業や各学年における学習コンテストの実施やテスト週間中の学習会など、基礎的・基本的内容の定着に力を入れて取り組んだ。授業では集中して取り組もうとする姿勢が見られた。

(3) 授業における一人一台端末の活用では、教科や学級活動だけでなく、総合的な学習の時間や行事など、積極的に使用することができた。

７　研究の課題

(1) アンケートを通して、同じ項目で生徒の実態について調べて２年目であるが、学習に向う態度の形成につなげていくことが課題である。継続したアンケート調査と、具体的な施策を進めていく必要がある。

(2) 学年間の授業を見合うことは効果的であった。教科間での学びあいを学年ごとに進めていくことで、より生徒の実態に合わせた学習に向けたスキルアップができるのではないかと考える。

（記入者　竹内　明美）